

夢窓幼稚園通信 第32号

2021年6月30日

いよいよ今年もターニングポイント、夏越水無月晦日を迎えました。正月元旦が遙か昔の気がします。様々なことがあった半年、そしていろいろなことが待っているこれからの半年でありましょう。これまでの時を、あらためてその惹味と共に受けとめ返し、次の時へと向かいたいと思います。

NHKの大河ドラマでは幕末から明治を舞台にした渋沢栄一が人気ようです。様々な近代化と社会事業の礎を築いたことで有名ですが、ひとつのエピソードに目が止まりました。

明治のはじめ、東京府が管轄していた、今でいう社会福祉施設「養育院」には自活が難しい人が沢山収容されていて、そこを管理委託するよう任された栄一は、その状態にびっくりしたそうです。お年寄りも子ども(ほとんどが捨て子)も病人も……が、一斉の部屋に詰めこまれ、皆無表情で通っていました。笑顔で走り回っているはずの子どもたちが、笑いも泣きもしないのです。栄一は「自分の欲望や気持ちを父母に訴え満たそうとするために泣き笑いするのに、それができず、依頼心も起きず、精気も表情もなくなってしまう」と感じたそうです。

職員に「子どもの本当の親になってほしい。」とお願いし、子どもたちの本来の姿に見合った環境を目指します。

人と人とのやりとり、子どもたちが安心して依頼心を表に出せるようになって表情はどんどん変わっていったようですが、こうした「慈善事業は怠け者をつくる」との理由で廃止が決まってしまう。

栄一は社会に訴え、寄附金集めに奔走し、施設を買い取り院長として終生過ごしたのです。

幸運く生まれ育った子どもたちも、栄一の施設で子どもらしく誰かを頼りにすることができ、きっと誰かに頼られる人として大きくなっていったことでしょう。

思うに私たち一人ひとりは、宇宙的な願いの中でここに生まれてきましたが、誰かを頼り支えられないと生きてはこれなかないでしょう。

頼れる誰かがいる、頼れる何かがあることは幸せなことです。安心して泣き笑いができ、そこに大切な存在があり支えがあることに気づける経験は、人と人が生きる世でのかけがえのない sacrament なのかもしれません。

夏越を終えると、「セ夕」です。

セ夕の願いを人生の命の数だけ経験できるとするなら、これまでもこれからも、私への(私のための)願いもあり、誰かや何か他者への願いもあり、様々その時々に変化していくのを自己確認するのかもしれないかもしれません。

今年の子どもの願いを、ひもかにかけてもらい、本格的な夏に向かていきたいと思います。

園長 升光 泰雄